

「んあっ♡あっあっ////」

逞しい背中に爪を立て、快感に身を委ねる。
私を抱いているこの男は恋人ではない。
いくらそうなりたいと願ってもなれない人だ、私とは全てが違う。

「っ…。ん？」

この人の遊び相手にしかなれないのがつらい。
そのくせ誰よりも優しく接してくるから突き放せない。

「痛いかな？」

痛いわけじゃない、あなたが離れて行くのが嫌なだけ。

「違っ…あっ、やだっ…。あっ/////奥っ♡奥やらあっ♡」

一番奥にキスするみたいに優しく押し付けてまた私の理性を奪う。
気持ちよくて熱くて幸せ。

「好きなくせに。」

低いけど優しい声で囁かれた。
この人の虜になってしまう、この人が欲しい。
どんなに強欲に望んでも彼は手に入らない。

「なあ、レイナ。…ずっと一緒にいようかな？」

どんなに切なそうに言われたってそこに愛はない。
だって彼は伯爵の美しい娘と結婚するためにこの地に来たのだから。

彼をこれ以上好きになってしまったら地獄でしかないのよ。